「日々の理科」（第 1841 号） 2019,-7,24

「学校のコウモリ （３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

生きたコウモリを、間近に観察できるチャンスはなかなかない。コウモリにはかわいそうだったが、逃がす前に少し観察させてもらった。

これはシャーレに入れたコウモリの子どもを、下から撮影したものである。フラッシュをたいているので、細部まで観察できる。コウモリの最大の特徴である、飛膜がよくわかる。一番上の指（親指に相当）は、飛膜の外に飛び出して鈎爪状になっているが、これは前肢でぶらさがる時、ほかのものにしがみつく時に役立つ。他の指は長く伸び、飛膜の骨組みの役割をしている。傘（コウモリ傘）の骨と同じだ。

フラッシュをたかないと、飛膜が透けて見える。いかに薄い膜かよくわかる。モモンガやムササビにも飛膜はあるが、それらは「滑空用」であって、上昇はできない。コウモリ（コウモリ目）は、鳥のように自在に飛ぶことができる、唯一の哺乳類である。

コウモリというと、このイラストのようなイメージを抱く。しかしこれは、決して誇張された表現ではなく、意外にもコウモリの形態的な特徴を、よく表現していると思う。

最後に逃がす場所に困った。子どもたちに見つかると、突かれたり触られたりしそうだ。校舎から遠く、よくコウモリを見かける「空域」の樹上に置いた。前肢の鈎爪をうまく使って、枝を登っていった。前肢と後肢を巧みに使うと、このように樹上を這って進むことも可能なのだ。

飼育は無理なので、親が助けに来れば幸いである。その間のエサが心配だが、すでに離乳していたようで、さっそく枝にいた虫を、自分から食べていた。ひとまず安心して、その場を去ることにした。